

『「見ため」の力—顔, 髪, 衣装—』の試み

村澤 博人

他にはない授業を

後期の第1週, 朝1限目からの授業。スタートする朝の9時頃には250人が入る教室が一杯になりはじめた。ほんとに「見ための力」の授業に来たの、と我が目を疑ってしまった。事前の予想では、土曜日の1~4限集中開講という特殊な形式のため、70~80人程度かと聞いていたが、ふたを開けてみたらまったく違う。授業を始めどころか、さらに遅れて教室にあぶれてきた学生をまずは空席に座ってもらうことから始まり、最初は授業どころではなかった。

準備は3年前から

「見ため」の力—顔, 髪, 衣装—の授業は、もともと2002年12月に開催されたアジア地域研究所主催の公開公演・講演会、「視角で語る・化粧—歌舞伎舞踊・中国京劇—」がきっかけとなっている。

社会学部の細井尚子先生が企画したテーマで、メイクアップ・アーティストの岡部礼子先生、京劇日舞の専門家

に化粧文化研究の私が加わり、日本と中国のステージメイクに日本の日常的なナチュラルメイクを加えて実演による美的感覚の違いを把握すると共に、化粧と顔の文化についての視覚的要素を比較した内容であった。学生がモデルになって比較できたことで親しみが倍増し、たいへん評判がよかった。私達もこの公開公演・講演会終了後、改良点を話し合う中で、より発展した形を考え始めた。

それが「見ため」の力—顔, 髪, 衣装—という、今まで大学ではほとんど取り上げられることがなかった講座へとつながったのである。

本講座では前述の3人の講師陣が中心となり、化粧学、顔学の成果による東アジアの美に対する観念の多様性について学び、さらに、化粧、髪型、服装など「見ため」が、自己演出上、また人とのかかわり合いの仕方について、どのような力を発揮するのかについて、取り上げた。具体的には見ため、外見に対する日本の社会における伝統的な考え方と現代の考え方、デジカメ撮影とパソコンによる顔加工を通しての自分

顔の多面的な認識、アメリカの変身番組の分析と討論、宝塚の男役メイクの実演とメイク顔の評価と分析、ヘアと服装を中心とした見ための意味とふだんとまったく異なる自分になるという変身の意味の学習、街（池袋）に出て人々の「見ため」の観察と分析など、講義系と実践系が密に連繋し、履修者が知識と実感で理解できる形にしている。

当初の想定では受講生は多くて80人ほど。履修者自身がメイク、ヘア、服装による変身など実践系が入るために、毎週1回1コマではなく、月1回1限から4限までを4回開講することにして、準備に掛かった。一番苦労したのはメイクとそのための化粧品の準備であった。メイクといってもどんなメイクがよいのか資料も集めて検討した。最終的には、受講生には男女ともいること、ステージメイクの方が変身の度合いが高いこと、男・女両方の特徴をもつことなどから、宝塚歌劇の男役のメイクに決定し、そのための資料収集が始まった。

さらには宝塚メイクのための化粧品の検討がなされた。限られた予算のため、最終的には8人で1セットの割合で揃える、アイラッシュ（つけまつげ）は各自が揃えるなどと、いろいろ工夫をしつつ、必要な化粧品を手分けして購入し、最終的にはセット単位に振り分ける作業もおこなった。

受講者のデジカメ撮影は初日の午前

中早い時期に撮りおえ、すぐに画像加工してプリントアウトするためにパソコンに強いアルバイトの手配をした。ここでの加工とは撮影した顔をそのまま、左右を逆にした顔、右半分で行った左右対称の顔、左右半分で行った左右対称の顔の作成で、この4つの顔をA4のコピー用紙にプリントアウトするのである。

また、CS放送から授業で使う変身番組の録画をして、最良のものの選定し、準備には万全を期したつもりであった。しかし、冒頭で紹介したように、その想定は初日から予想を大幅に上回る受講生数といううれしい事態に、変更を余儀なくされてしまった。

初回—うれしい計算違い

正直、初日は主として私が担当だったこともあり、たいへん慌てた。予定の4～5倍の受講生を前に、顔写真は撮影するが、午後までに加工してプリントアウトすることはまったく不可能なので、次回の10月の講義までに間に合わせることにした。しかし、250人ほどの顔写真をデジカメで撮る時間は予想以上に必要で、結局1限目は受講生の整理と顔写真撮影で終わってしまった。

続いてCSで放映されている変身番組を上映して、日常と違う自分になるための例示を見てもらい、そのためにどんなことが要求されるのかを想定してもらった。内容的には米国の中心部

に住むカーレーサーがニューヨークに出かけ、3週間でドラッグクイーンになるというストーリーで、女装という点で受講生にとっては興味深い内容だったようだ。後で再度述べるが、その後のプログラム変更により、この番組とさらに係わることになった。

初日の午後は、私のパワーポイントを使った講義が中心となった。1980年代以降の化粧や顔を取り巻く社会の変化を紹介しながら、外見に対する意識の変化を学習してもらい、なぜ、見た目が問題となるのかを紹介した。また、伝統的に日本人がもっている顔や化粧に対する価値観を歴史だけでなく、東アジアとの比較研究の結果をも含めて提示してさらに理解を深めてもらった。

初回は人数のことで時間を含めた変更が余儀なくされたが、終了後、残り3回の授業内容の組み方についてどう変更するか検討会を開いた。当初は全員でメイクの実習をし、衣装などによる変身をして、それから街に出かけるという順番を想定していたが、200人を超える人数が一度にメイクするには正直、化粧品が足りないだけでなく、指導する側の人数も足りず、楽しいはずの実習が指導不足という不満を生む可能性が大きい。そこで残りの3回は学生の所属学部別に3グループに分け、本来の講座の構成要素を「らしさ」「衣装」「化粧」の3つに特化して分け、3人の講師それぞれが担当して3コマ

分を行い、残りの1コマを受講生全員に対して行なう講義系とした。急に教室を3箇所使用するなどの変更が出たわけだが、大学が特例として迅速に対応して下さり、こうした変更が実現した。

2回目以降— 3つに分かれて

10月の授業は、1限を受講者全員を集めて行なうものにし、9月に撮った顔写真の配布から始まった。人数が多いために、プリントアウトした顔写真の一部をスクリーンに映し、該当者に取りに来てもらう方法を採用した。映した顔がデジカメで撮ったままの写真であったため、学生はわいわい言いながら取りに来てくれた。自分の顔がスクリーンいっぱいの大写で紹介されるというハプニングと加工された自分の顔の左右対称なヘアスタイルのおもしろさなどでぎやかな時間であった。

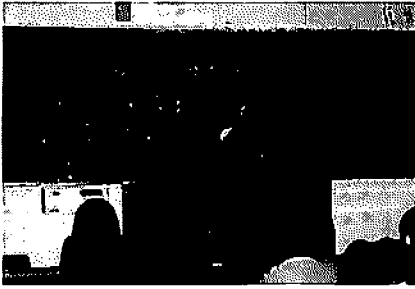
渡し終わってから、顔写真の見方と左右対称性の悪い人の原因について、片噛み、口呼吸、寝方などから情報提供をした。顔については、単なる形態的な問題だけでなく、健康との関係を語ることは必要なことだと考えている。

「らしさ」(担当村澤)

—「ストリッパーに変身」ビデオ

2限目からは3グループに分かれての授業である。

「らしさ」のグループは、CSで放映



「らしさ」変身のビデオを見てのまどめ

されている変身番組を2本鑑賞して変身の分析をおこなった。1本約50分で、最初は大学教授がストリッパーになる

「らしさ」変身のビデオを見て

続いてハーバードでの理科系の女性がチアガールに変身する番組を選んだ。ビデオを見ながら、変身するために要求されたこと、努力したこと、大きな問題点、どのように克服したのか、などを見終わってからじっくり議論をして、理解を深めることにした。番組そのもののおもしろさも手伝ってか、慣れてくるといろいろと発言が出てきてそれなりの議論はできたと思っている。

最後にこのような変身体験、どちらも3週間、変身のためのあらゆる努力をする体験について聞いてみると、なかにはうまくできないのではと言う否定的な意見もあったが、半数以上がやってみたいと即答した。おそらくその体験を通して自分を変えられる、その後の生き方が大きく変わる、あるいは自信をもって前向きに生きていけると

思わせる内容だったので、受講生の反応には正直な気持ちが出ていたと思われる。

このグループは最後の1コマを変身するための参考として、街に出て歩いている人の見た目を観察すること、必要なら声をかけて話をするを推奨した。戻ってからの報告から、声掛けなどは一回のやりとりで終わった場合がほとんどで、複数回のやりとりは少なかったのは残念であった。

「化粧」(担当岡部)

—タカラジェンヌに変身

メイク体験は本講座では大きな目玉である。受講生の1割ほどいる男子学生も女子学生同様に宝塚歌劇の男役のメイクをした。

メイクの実習は男子学生のほとんどがそうであるように、メイクをしたことがない人からふだんメイクをした人までいるために、わかっているつもりで話しても常に確認をしないと通じないことがしばしばである。かつ実際に手を動かしているところをチェックし



模範を示す



模範を見ながら、自分でメイク



個々に修正も

ながら、あるいは手の動かし方などを個別に教えながら進めることが要求されるためにボランティアのアシスタントにも加わってもらった。

まずは宝塚歌劇と、どんなメイクをするのかの概要を講義し、つぎに学生の一人にモデルになってもらって実際のメイクのやり方を段階別に見せ、受講生はそれを見ながら自分の顔にメイクしていく。手際よく進む人もいれば何回もやり直している人、ふだんのメイクが頭から離れないせいか、宝塚歌劇のメイクという大胆なステージメイクに思いっきり入り込めない人などいろいろである。

仕上がると、学生の多くは携帯で記

念撮影。デジカメ付き携帯の多さに驚かされる。最後は元の顔に戻すためにメイク落とし。これはさっさとできるが、しっかり鏡を見てないと、アイラインなど落とし残しのある顔で帰宅しようとする人もいた。

終了後、感想を書いてもらっているが、「一生に一度の貴重な体験をした」「こんな濃いメイクは始めて」「自分の顔の変化に驚いた」とか、「男役の顔の作り方にチャレンジできたので、いつものメイクのコツがわかりかけてきた。男役の眉はかなり思い切らないと太く描けなかった」「ふだんのキレイに見せる化粧では体験できなかったことを通して、今までの自分の見え方が



楽しく変身



半分完成



一応完成



座席列別に完成記念の集合写真

変わった」など予想以上の結果が出たように思えた。

「衣装」(担当 細井)

一なりきりショー

ここは3グループのなかで、受講生にとっては、ある意味で一番たいへんだったはずである。衣装での変身をより明確に実感するために、性別、年齢、性格など、自分とはできるだけ異なる人物の衣装を準備してこなければならない。前もって自分でどうするかを考え、家族や友人から衣装を借りてくるのだから、受講者にとって、授業は授業の前にすでに始まっているのである。

授業では、まずCSで放映されている変身番組のうち、田舎の牧師がラスベガスの車の販売員に変身するものを見て、変身のために必要な要素や仕掛けをリストアップする。次に自分が持って来た衣装が、どのような人物が着るものなのか、具体的に書き出す。そして「なりきりショー」で、その人物になって演じ、互いにその「らしさ」

を評価しあう。教壇とはいえ、一段高い所に上り、みんなの前で、女性は男性に、男性は女性に、また子供や中年の人物を演じるのだから、恥ずかしさもあり、大変だったと思うが、言葉や小道具を用いるなど、誰もが様々な工夫をし、積極的に「なりきりショー」の役目を果たしていた。評価はすぐに集計して高得点の集まったものの特徴をまとめ、他人の視線が「その人らしい」と認知する場合の「らしさ」の度合いについて考え、最後に宝塚歌劇のスーツ物のビデオを一部見て、私達の日常より誇張される舞台の動き、舞台衣装のデザイン上の工夫などから、衣装の限界とその限界を超えるための要素について確認した。

この「衣装」では、他人に対し、自分の見ためから中味を想定させる、それをコントロールできるというのは学習できたかと思うが、どんな衣装を準備できるかという点での制約からくる問題があった。受講生が準備してきた衣装は、家族や友人から借りられる範囲内で自分とは異なる属性の人物の衣



なりきりショー 男子学生が中年女性に变身

装を選ぶことになるため、必ずしも自分がなりたいと思う人物に相応しいと考える衣装ではないのである。もし、なりたい自分をモデルにできてきたなら、より日常的な実践に活かしやすいものとなっただろう。

3回目の講義の締めは

情報提供としての講義の締めは生まれつき顔に病気（アザなど）のある人あるいはけがや火傷で生まれつきの見ためを失ってしまった人たちのドキュメンタリーを見てもらい、見ための多様な側面を学んでもらった。

見ためというと、つい美醜という評価軸のみで考えがちだが、病気や事故で顔に障害をもった人にとっては見ためによる差別や誤解に悩まされること

も多い。そんな人たちの声を直接聞いてもらい、そのような人たちとどう接すればよいのかを考えてもらう時間である。

伝統的には日本の社会では「顔じゃない心だよ」と代表されるように外見と内面をわけ、外見を軽視する一方内面を重視してきた歴史がある。かといってまったく外见到こだわらなかったのかといえばむしろ逆で、髪型や化粧の歴史や服装史を見ても、外見とその人の社会的な地位は切っても切れない関係があった。

しかし、例えば、茶髪の流行は「日本人は黒い髪」という万葉の時代以降の価値観を壊してしまったように、ふだんの個人の生活では自由に外見を選べる時代になった。



なりきりショー 真剣に評価する受講生

その一方で、病気と外見の関係を診ると、まだまだ「いのちが助かったのだから外見は我慢しろ」という風潮が残っていることは確かだ。欧米では手術で顔の一部を失うことになっても手術する前に損失した部位に対して、このような補綴物（日本ではエビテーゼと呼ばれる。義眼など）が用意できるから安心してください、というシステムができあがっているのは大違いである。眼球を失う人に対して欧米並みに外見の回復の道が提示され、外見にもその人らしさが尊重されるようになって欲しい。

見ためと社会の多様な側面を提示することで、見た目のもつ意味、役割が理解されようし、見ためを利用することでよりよく生きることができると

をもこの機会に考えてもらえればと考えている。

4 回目の最後のコマ

通常本講座のように半期開講の場合は15コマを標準として構成するが、本講座では16コマで構成し、最後の1コマを教場レポート形式にした。「らしさ」「化粧」「衣装」それぞれから出された問題は、授業に積極的に参加した者でなければ記述できないタイプのものであったが、総じてよくポイントが把握されていた。土曜日の9時から16時20分まで拘束する講座であったが、よくがんばってくれたと受講生に感謝したい。

このように本講座は、与えられた知識を憶えるだけという受身のものでは

なく、実践を通じて知識を実感を伴って理解する形式で展開した。「見ため」の力は他人との関係において発揮されると同時に、自分に対しての変革作用もある。講座が終わればそれで終わってしまうのではなく、「見ため」の力についての認識が、それぞれの生き方をも考えてもらうきっかけになればうれしい。

本講座は05年度も後期に同形式で開講する。04年度の内容・構成の良かった点、改良点を検討し、さらに充実した講座となるように準備している。また自発的・積極的な受講生に会えることを、講師陣一同楽しみにしている。

むらさわ ひろと
(本学兼任講師)